

〔類聚名義抄〕三鬢音還、ミツラ、

〔増補下學集〕上二鬢支體也、

〔書言字考節用集〕五體鬢唐韻也、鬢字苑、

〔倭訓栞〕前編三十みづら日本紀に、鬢又鬢をよめり、御鬢の義也、女のもとりの事をかづらと

いひ、男のもとりの事をみづらといひ、字も鬢と鬢とにて分てり、源氏に、みづらゆひといへる

は鬢づら也、萬葉集に、角髪をみづらとよめり、左右に分れたるが角のごときをいふ、即角子也、こ

をもとはみづらといひし也、延喜春宮式元日朝賀の條に、雙童鬢といふ事見ゆ、後には又彼雙童

鬢を耳の上にてゆひて、耳の前にさげる也、あげみづらはその末を耳の上まで引あげて、みづら

は直に垂る也、此結様は雅亮抄にくはしく見ゆ、關東にさゝげの短きを呼てみづらといふ、こを

たばねたる形の似たる也、

〔古事記傳〕六御美豆良は、上代に男の御裝にて、髪を左右へ分て、結縮たるものなり、下に天照大御

神の解御髮纏御美豆羅たまふとあるも、書紀に息長足姬尊の檀日浦にして、御髪を解して海に

入洗たまひて、占たまふに、御髪自分たるを、即その分れたるまゝに結て、鬢としたまふことある

も、假に男貌と爲たまふなり、又崇峻紀に、古俗年少兒、年十五六間束髮於額、十七八間分爲角子、今

亦然之とある、此角子即美豆良なり、十七八間とあるは、や、後のことなるべし、いと上代は、すべ

後の稱なり、即ち、後のことなるべし、いと上代は、すべ万葉十八丁に角髪とあり、左右にあるが角の如くなる故に、かゝる稱は有なり、

後世に鬢頰と云は、此美豆良を訛れる言なり、江次第に、幼主

〔松屋筆記〕百三鬢

按ピンヅラは、美豆良を訛れる語なり、美は万の通音にて左右也、左右手を万天と訓るがごとし、

豆良は、列也、左右に列立る義にて結髪の頭上の左右に列立る貌よりいへるなるべし、加良和は